詩人萩原朔太郎の研究

長　尾　和　男

A Study on "Sakutaro Hagiwara's Poems"

This is a study on Sakutaro Hagiwara's Japanese poet, especially on his view of nature, his indifference toword Japanese gardene, his love of green and his thought of "adultery of plants." his thought of "revolution to Japane."

1

朔太郎には自然界に対し特殊の心情をもっていたと見るべき節がある。世間通常の人間がもっている、自然の景観に対するものとは頗る変っていた。彼を知る第一人者とみられている三好達治の「萩原朔太郎」にはこう書かれている。

「窓外に移りゆく山野の景色、海岸の眺望など、あの人には全く何の興味もない退屈な空間にすぎなかった」

又、彼のアブノーマルな性格を物語るエピソードとして、①桑原武夫は次のようなことを書いている。

桑原氏らが、かつて朔太郎に京都の名園を見て貰おうという意図で、京都の名園淀野の大仙院の石庭見物に出かけた事があった。この時彼は57歳で、昭和17年のことであった。有名な詩人が来られるというので、大仙院の住職が出むかえていとていねいに説明をしたところ、「この庭はまず、型をつくるのに大変だったでしょうな。むつかしかったでしょうね」といって住職たちを面くらわせたという逸話がある。住職が「この庭は相阿弥の枯山水で、伝統に工夫を加えての創作です」といったところ、「いや、伝統とか形式とかじゃありません。これをこしらえるためにこう流しこむカタをまずつくる……」と答えた。

すなわち、彼には石庭全体が一種の鋳物かなにかのような、型でつくられている、工作物としか写らなかったのであった。こんな精神の構造はたしかに正常とはいえない。たしかに、彼にはアブノーマルな一面があったという証拠となるであろう。象徴的な優秀な詩をものした彼に、石庭の趣きが、こんないびつなふうにしか受取られなかったということは、たしかにおかしい事である。が〈500年不出世〉と目される大天才にはこんないびつな一面がたしかにあったことは否めない事実である。

石庭見物のあと、桑原氏らは「苔庭に案内いたしましょう」といったところ「いや、庭のことはぼくには絶対にわからん、もう帰ろう。もう帰ろう」といったという。人にへつらったりすることの絶対に出来なかった大まじめな朔太郎の性格をむき出しにした一こまであった。自然の景観のうつくしさが、林泉のたたずまいの美や、山川の趣きが理解されない彼に庭園の美がわかろうはずはない。日本庭園の美とは、自然の景観を縮めたものだからである。

筆者の如きも朔太郎の心情に共感するところがある。日本の名勝を見ても、どこがどんなふうによいのか、よくわからない。日本三景の一つ天の橋立でも、ただ長っ細い岬の出っぱりというだけで、たしかに奇観にはちがいないが、どうも日本の絶景といわれる理由はよくわからない。松尾芭蕉が「松島の月まず心にかかりてとるものも手につかず」とひどく賞賛した気持ちも私にはよくわからない。松島へはまだ行ったことはないが写真やテレビなどを見て類推すると、大小さまざまの島が点在するだけで、あまり大したところとも思えそうにもない。いったい名所趣味は筆者などには欠けているのかもしれない。越前の永平寺へ行っても、極めて狭い場所に、よくまあこれだけの建物をこまこまとつくったものだと、そのせせこましさにうんざりさせられるだけだった。しかもそれらの建物は山の急坂にずいぶん無理をして造営されていた。禅の大らかさなどはどこにも見当らなかった。もっとも、禅は現実のせせこましさにいて、それを超えて大自在を獲得するのだ……といえばそれまでだが。

大和だったかの聖徳太子の勅願寺も見たが、同様にちょこまかとしたせせこましさしか印象にのこらなかった。

そういえば日本の庭園風景には、人工のせせこましさが目立っているのでは

ないだろうか。金沢の兼六園、四国高松の栗林公園、奈良・京都の銀閣寺だとか仁和寺だとかの庭園を見ても、人工的な小じんまりしたなだらかな曲線の美以上の何ものでもないと思われる。ブルノー・タウトはいう。「江戸の勢力圏内の農家のある種のものは支配的ゼスチュアーや生硬さが目立つ」と。日本の箱庭式の山水美には、自然をいじめ、歪曲しひんまげる根性がまる出しである。さらに言えば、日本の盆栽という興趣などは一大嗜虐趣味でもあるだろう。そこでは、枝を切り落し、葉をもぎ取り、あるいは植木鉢という大地をちぢめた所で根の発育を制御して植物の小人や傴僂（せむし）をつくってしまう。

日本人はまた生花という方式で自然の植物をもてあそぶ。剣山（けんざん）という地獄の責め道具の針の山に草花や樹枝を突さしそれを眺めてよろこぶ。生花は自然の草木を戸外から室内に持込む方式である。自然の草木をいじめさいなむ点においては盆栽と同じやり方である。しかも日本人はその残虐行為を美化して自然に親しむとか自然のふところに入るとか言っている。しかしこの自己の悪行のカムフラージュや美化の考え方はどこの国にも共通ではあるのだが。

数年前に信州の釜無温泉に一夜泊った事がある。朝起きて散歩しようとして玄関へ出ると、宿の小娘が猫を抱いておいおい泣いているので、どうしたのかと聞くと「今日お嫁めに行くんやに」と答える。「お嫁め入り？」ときき直すと、「ええ、かわいそうに捨てられるのやに」という。即ち信州のこの地方では飼猫を捨てる悪行を「お嫁にやる」という美辞でカムフラージュしているのである。老人を奥山に遺棄する所謂太古の姨捨（をばすて）伝説も「お山参り」という美辞で偽装されていた。

註　①　日本文学資料叢書「萩原朔太郎」（有精堂）萩原朔太郎の庭見物―桑原武夫

2

わが朔太郎の自然に対する心情は、日本の伝統的な自然美に対する態度とすこぶるかけ離れていた。いな、日本の伝統美のかけらもなかった。彼の自然美は原初的であった。具体的に言えば、植物の緑を愛するという一事につきた。

「庭には太い梧桐（あおぎり）や、よく咲く白梅（しらうめ）や、沈丁花（じんちょうげ）、あじさいなどをたくさん植えてあり、軒先の藤棚（ふじだな）は年ごとに満開になって、お酒の時は、父はこの藤を見

て楽しんでいた」

とか、また「沈丁花や藤の花房が、まだ白っぽく庭に浮いて見えるような夕方、茶の間で、ひっそりと、一人で飲んでいる父をよく見かけた」とか、朔太郎の長女萩原葉子は「父・萩原朔太郎」の中に書いている。

彼の楽しんだのは日本の伝統的自然美ではなくて、自然の植物のもつ緑であったのだ。原初的な緑葉だったのである。

こんなばあい、彼の反日本的伝統美をすぐに西欧的美への傾斜であると即断してはならない。自然観として原初的であっただけで、反日本でも、親西欧でもない。

彼は特に若草の緑を愛した。

「若草の上をあるいてゐるとき
　わたしは五月の貴公子である。」

（五月の貴公子、「月に吠える」中の一節）

「汽車が山道をゆくとき
　みづいろの窓によりかかりて
　われひとりうれしきことをおもはむ
　五月の朝のしののめ
　うら若草のもえいづる心まかせに。」

（「純情小曲集」旅上、中の一節）

②
森の中の小径にそふて
まっ白い共同椅子がならんでゐる
そこらはさむしい山の中で
たいそう緑のかけ（ママ）がふかい

（下略）

この詩は朔太郎の書斎にはってある詩で、彼が好んでつかった、青い罫の文房堂製原稿用紙に書いてある。

註　②　「月に吠える」の〈白い共同椅子〉

3

朔太郎の[③]書斎は、今、彼の学んだ前橋市の桃ノ井小学校の校庭の一隅に移築され、保存されてある。昔どこの家にもあった、味噌蔵を改造して朔太郎が書斎としたものである。この書斎は木造洋式で1.5×3.5Kの南向に建てられ、純書斎の部分は5畳足らずであろうか。壁紙は当時のままの実物の端切れが展示

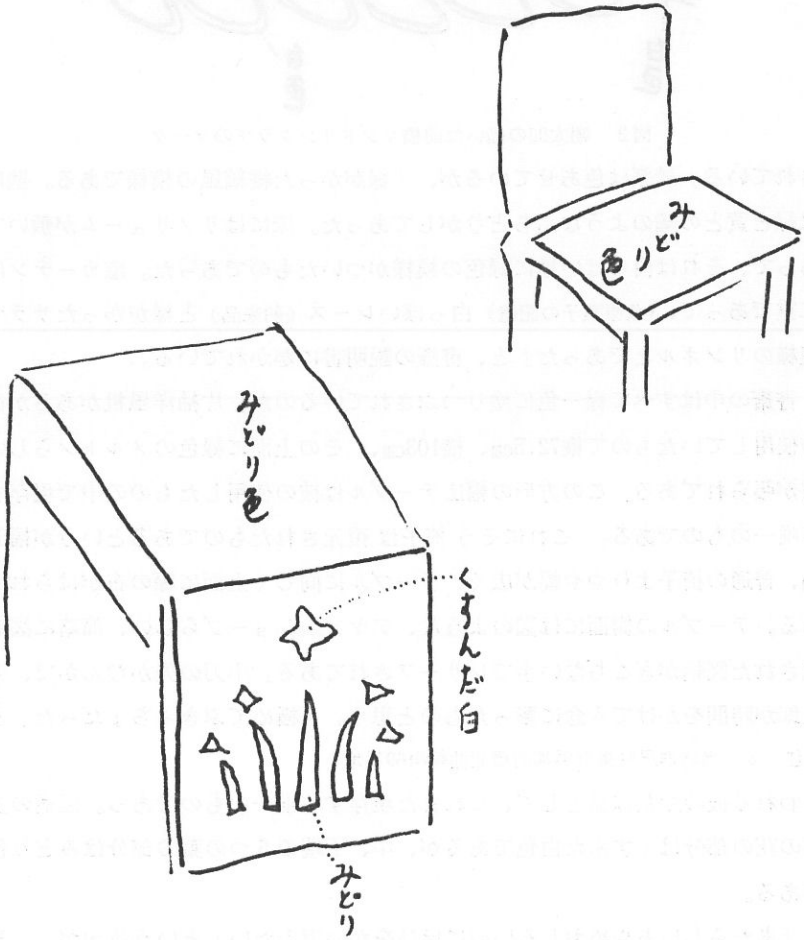

図1　朔太郎の使っていた机と椅子

図2　朔太郎の描いた前橋マンドリンクラブのマーク

されている。壁紙は色あせているが、「緑がかった縦縞風の模様である。壁には緑と黄との縄のようなふちどりがしてあった。床にはリノリュームが敷いてあって、それは白っぽい地に緑色の模様がついたものであった。窓カーテンは二重であって、（萩原葉子の記憶）白っぽいレース（舶来品）と緑がかったサラサ模様のリンネルとであった」と、書斎の説明書にかかれている。

書斎の中はすべて緑一色に塗りつぶされているのだ。片袖洋風机があるが彼の使用していたもので縦72.5㎝、横103㎝、その上面に緑色のメルトンらしい布が張られてある。この方形の幅広テーブルは彼の使用したものの中で現存する唯一のものである。これにそう椅子は復元されたものであるというが幅65㎝、普通の椅子よりやや幅が広く、テーブルに同じく上面に緑の布がはられてある。テーブルの側面には図のような、アヤメかショーブらしい、簡略に図案化された図柄がぎこちない手でレリーフされてある。小刀の先かなんかで、朔太郎が時間をかけて入念に彫ったものと思う。「極めてぶきっちょだった」と

註　③　当時群馬県東群馬郡前橋北曲輪町69番地

いわれる彼の彫刻作品として、これまた現存する唯一のものである。図柄の上端の花の部分はくすんだ白色であるが、中、下端の5つの葉の部分はみどり色である。

「あたらしいあやめおしろいのにほひをかいでゐたい」という語句が、「五月の貴公子」にあるから、アヤメの図柄であるかもしれない。

朔太郎の精神には上述のように自然の風景を愛するということは欠除していたが、ただ5月の初夏の緑だけには心をひかれた。いや、むしろ色彩の中で緑だけには異常なほどに執着した。彼の認識体質が、そういう原初的な面だけに鋭敏であったのである。

緑は人間の眼に休養を与える作用を持つとされている。高速道路の中央分離帯などに緑樹を植えるのはドライバーの眼を休養させるためである。

また、人の生活環境の色を、緑・青緑（シアン）・青・青紫――冷色系統の色にすると、長時間を経ても飽くことなく、時間の経過を短かく感じさせられるが、赤紫・赤・オレンジ・黄――の暖色系統にすると、時間の経過が長く感じられ疲労感が強い。

黄緑・紫――は冷暖にかたよらない。

黄緑系統は精神を落つかせるために工場内部の壁や天井につかわれ、また新幹線の天井なども同様黄緑系統の色彩をつかわれる。

飲食店などは暖色の赤黄系統を使うが、これは客の視力を通して食物をうまく感じさせるためと、飽かせて、客の回転を早めるためとである。

④ドイツの建築家ブルノウ・タウト（Bruno Taut 1880～1938）は1933年から7年の間日本に滞在していて、日本建築の良き批判者・理解者であるが、日本の気象条件が欧州とちがって、日本では太陽の光線が強烈であるので、昔の建築は廂を備えて眼を守ろうとしている。さらに、また庭園は緑色を主色とし、庭園を見る習慣によって眼を保護しようとしていることを指摘している。

朔太郎が、自然の緑色に異常な執着をもったことは、彼の本能的・原初的・直観力が、眼を守ることをしらずしらず無意識的に知ったことにつながるであろう。眼を守り、疲労を慰することが、身体の弱い彼にとっては必須の健康条件であったのである。

森の中へ入ると木の香りがする。その木々の緑の直上には、特殊カメラで撮ると、もやが見える。この黄色いもやはすなわち緑からでている物質で、U字管の中にこのもやをとり集めることができる。樹木の緑から分泌しているこの物質はテルペン（terpen―独―）である。テルペンは植物体中に生成しイソプレン（C_5H_8）を構成単位とする一群の物質である。実験の結果、針葉樹から発散

しているテルペンの量は一番に多く広葉樹のテルペンはこれに次ぐ。

今、色々の樹木の緑葉のついた枝数本をとり室の中に置くと、しばらくして室内のタンサンガスの量が少な目となり、気分が落着いてくる。その他、緑葉の緑の効果は、人の心をなぐさめると共に、医学的薬物的効果をもつ。ソ連のレニングラードの某大学教授は、最近桜の葉でその殺菌力があるかどうかを試みたが、それは見事に成功した。彼は桜の葉からテルペンをとり、その中へ、ワ虫とラッパ虫を入れたところ、虫はすぐは活発であったが、2分たつとのびた体が丸くなり3分すぎると全部丸くなり、やがて死んでしまった。

東京農大の神山教授は、東京神田の汚染度の濃い緑葉のテルペンと、空気の清らかな山中の森のテルペンとを分析機にかけて、比較したところ、前者より後者の方がテルペンの量が多く、緑の内容は不明ながら、その気分をなごませる効果も亦新鮮な山中の森の方がはるかに確実であることがわかったと報告している。緑樹はまた水銀・カドミューム等の有毒物をも吸収し、緑葉は酸素を出す。人は1日に1万リットルの空気を必要とし、緑葉の出す酸素をとらなければならないといわれる。

朔太郎が強く緑を愛したことは、その鋭敏な感受性によるものである。いうならばテルペンの威力を直覚的に先取りしていたとも言える。彼はその精神を新緑によってなぐさめられ、気分のいらだちを沈静させ、眼の疲労をいやされ、かくて身心の疲労を快復させていたのである。

とくに朔太郎が好んだ松の緑は広葉樹の緑よりテルペンの量が多かった。

4

⑤むくむくと肥えふとって白くくびれているふしぎな球形の幻像よそれは耳もない顔もないつるつるとして空にのぼる野蔦のやうだ（さびしい来歴）〈行いは少なく、想は充ち足る〉といわれたボードレールと同じく幻想好きで、想像の極限までを天翔けろうとする朔太郎は、或る日、われながらすばらしいイメージを発見した。それは「草木婚」の思想であった。「草木婚」は当然「草木姦淫」(adultery of plants) を考えさせた。哲学的幻想者であった彼にはふさわし

い新語というべきであろう。

性的に未発達であったと推定される彼は、現実的不満を幻想の世界で補わねばならなかったことは当然である。幻想愛好は内攻的となり、やがては人間嫌いの思想を生んだ。人間嫌いの幻想者は、動物を愛するか植物を愛するかであるが、動物を愛する者は人間を愛する者でもあるので、人間きらいは植物を愛するという側に立つことになろう。

「鶴の恩返し」伝説や、「八犬伝」や中国の「白蛇伝」などは動物愛の思想であるが、植物愛の思想も太古から日本にもあり、ギリシャにもあった。アニミズム（animism）の思想がそれである。日本の「古事記」に記されている「木ぼめの歌」などはその好例である。日本人が自然を愛する、とか自然の懐に入るとかいうのはこのアニミズムの思想に基いているのである。

筆者はかつて「半人植物」という詩集を出したが、この「半人植物」というイメージは、「半羊神」からひき出した筆者の創作語であるが、後に、この語はギリシャ神話の中にもあるということをなにかで見た。

日本伝説にも⑥、柳の木の精がお柳という女性に化けて若い侍の妻となり子供までなすというのがあり、また⑦葛の葉狐が女性に化けて男性とちぎるという伝説もある。中国の⑧「西遊記」の中にも、杏（からもも）の木の妖怪、杏仙女が、三蔵法師を誘惑しようとするくだりがあった。

註 ④ 「気候、外気、外光は宇宙現象であって、建築家は自然に一致するものを造らんとするならば、その制作に当って何よりも先づ、此等のものと調和を保つことを心掛けねばならない。日本の空が青色を呈することは極めて稀であって、大抵は硝子のやうに透明で、雲の出てゐる時でさへ眩しい程である。それ故にこそ、日本の古い家屋は廂を備へて、眼を守り、また庭園へ眼を向ける習慣があるのである。この庭といふのがまた、同じ理由から殆んど緑一色で、欧風の花園の華麗さは全く見られない。」（「日本文化私観」ブルノー・タウト）

⑤ 「青猫」〈さびしい来歴〉

⑥ 「三十三間堂棟木の由来」

⑦ 「芦屋道満大内鑑」（通称）「葛の葉」は竹田出雲の浄瑠璃で、葛の葉狐の伝

説等によったものである。

⑧ 絵本西遊記３編　巻５

5

朔太郎を医学的、特に精神病理学的に診断するならば、彼は易感性関係念慮にもとずく、すべてを邪推し易い性格の持主であったといわれる。易感性関係念慮（Sensitive Bezishungsidie（Kretschi mer, E））とは、被害者意識の強い病的な状態をいう。

彼の晩年の病歴をしらべてみると、昭和16年56歳頃から健康を害して臥床することが多くなり、とくに持病の痔疾が重くて出血があり、血がぽとぽとたれる程であった。しかし飲酒は病気に無関係で、むしろ嗜虐的に、そんな状態の時でも、家をこっそり抜け出してのみ歩るくという次第であった。彼は以前から⑨神経衰弱症をもっていたが、その頃から強度になった。もう訪問客にあうことも避けるようになった。翌17年の３月末より、風邪にかかり寝こみ、４月中旬すぎからは病状悪化の一路をたどり、明治大学の講師もこのごろ止めた。５月11日午前３時ついに死んだ。肺炎が直接の原因だった。57歳であった。彼は晩年には医師も殆んど近づけなかった。そして死ぬる直前に「悪魔が追っかけてくる」と叫んだりしたと言われる。神経衰弱症・恐怖症的な朔太郎であった。

生前彼に最も親しかった詩人であり、かつ朔太郎に関する研究で、最も権威あるエッセイ・論文をものした三好達治は、その著「萩原朔太郎」の中に次のように書いている。

「あの人はなんか苦しみとか危険があると、それを何百倍かにして大きく感ずる人だからね」

村上一郎は「朔太郎の病理は、病的な、性格傾向は多分にあったにせよ、クランクハイト（病）でも、グレンツ（境い目）でもない」としている。

なお、松井好夫博士は、朔太郎の病状を精神医学的に診断して、分裂病質（シツオイド）の上に、種々の病理学的症状が加わったものであるとし、梶谷哲男博士は、精神病特に分裂症を思わせるところも無いではないが、自己不確実者の強迫神経

症、不安神経症、 易感性関係念慮の域を出ないものであろう、 と診断している。

かく諸家の精神病理に対する諸説を綜合し勘案する時、朔太郎は少青年時よりやや神経症的であり晩年には、それが高じて不安神経症と強迫神経症に落ち入っていたと考えてまちがいなさそうである。

註 ⑨ 神経症（精神病質人格）とは強い悩み、不安や身心過労などからくる病的な反応である。心因性反応ともよばれる。神経症は、身体の器官や組識には変化はないが、その機能はうまくゆかない。具体的にいえば感情のいらだち、不安感、強迫観念などの精神的症状や、動悸・目まいなどの身体的症状が発作的・持続的におこる。神経症を細かくわければ、神経衰弱(ノイローゼ)・無力性精神病質・不安神経症・自信欠望精神病質・強迫神経症(精神病質)・ヒステリー（顕揚性―誇強性―精神病質)などである。(医学辞典等による)

前記両博士の説は、一種の「境界状態」をさすもので昔の分裂症にも神経症にも入らない、一歩手前の状態をさすもので、この境界状態にある作家は不安の中におかれる。この不安が創作活動の源泉となる。即ち発病一歩手前の不安からくる緊張感・緊迫感はすばらしい創作の母胎となるのである。

良家のお坊っちゃん風の幼稚さからいくつになっても抜け切らない、世間知らずであり、また朔太郎の性格にはいびつなところがあった。彼と同時代の天才たち、啄木とか白秋、暮鳥、犀星らとくらべて、精神の発達が全体的にそろわず、いびつであった。例えば詩や音楽に対する感覚は進んでいたが、異性に対する性的能力などはひどくおくれていたのではなかろうか。彼は33歳で父たちにすすめられて結婚したが、そんな理由もあって失敗であった。

こういう青年期の精神のアンバランスな発達、精神発達の非同時性は、彼が青年期後半になっても自己をつかみ、まとめ得ない、同一性拡散（アイデンティティ）の状態におかれた。彼の恐怖症を端的に表わした詩が「田舎を恐る」である。

⑩
田舎を恐る田舎の人気のない水田の中にふるへて、
ほそながくのびる苗の列をおそれる。

くらい家屋の中に住むまづしい人間のむれをおそれる。
田舎のあぜみちに坐ってゐると、
おほなみのやうな土壌の重みが、わたしの心をくらくする、
土壌のくさったにほひが私の皮膚をくろずませる、
冬枯れのさびしい自然が私の生活をくるしくする。
田舎の空気は陰鬱で重くるしい、
田舎の手触りはざらざらして気もちがわるい、
わたしはときどき田舎を思ふと、
きめのあらい動物の皮膚のにほひに悩まされる。
わたしは田舎をおそれる、
田舎は熱病の青白い夢である。

通常の人ならば、田舎というイメージには、素朴とか清純とか、空気の清く緑の新鮮であることとかがうたい出されるであろうが、朔太郎のばあいはそうでなくて、貧しい農民、土の重圧感、腐敗臭（これは、堆肥のすえた匂いであろう。）、陰うつな空気、きめのあらい動物の皮膚の触感である。

とくに目立つのは稲の苗の列のトンガリを恐れる。彼が好んで使う、松葉のトンガリも同一趣好であるが、それらのするどいトンガリは針のように彼をこわがらせるのである。

幼少の頃、女中がシャモジの影を壁にうつしたところそれを見て卒倒し発熱してねこんでしまったという憶病なデリケートな神経の彼には、田舎の自然は、きめの荒い動物の皮膚のようなザラザラの触感であった。

このことは、上州名物の冬の自然がカラッ風が吹きあれ、「万物悉く蕭条たる」ものであったことに起因する。また、群馬県前橋市から熊谷にかけては地形的に昔から雷雨の多いところとされている。朔太郎が「光り」を詩の中に多く取り入れていることと電光とは関係があるだろう。

⑪夏の自然は上州が落雷の名所であり、それは木訥ではげしい上州気質と無関係ではないだろう。一般に「上州名物、嬶天下に空っ風」といわれている。

「くらい家の中に住むまづしい人間のむれ」が恐ろしい対象であったのは、

主に青年期の「⑫最も感じ易く、異常に優柔であり、常に傷けられた含羞草のような性質」で、ロマンチックで観念的な貴族趣味であった彼には田舎人は、どうしてもなじめない、きめの荒い野獣としかうつらなかったのであった。田舎人も、前橋町の人も彼には、決してとけこむことの出来ない野卑な異邦人だったのである。

「大渡橋」の中で、彼は「郷里にありてゆかず」と書いている。ゆかずとは溶けこむことが出来ないという意味である。朔太郎の父も、30歳40歳になっても生活することのできない、不甲斐ない彼をいつもひどくののしっていた。郷里の人々も、前橋町や田舎の人々も口をそろえて、彼を馬鹿にし「われを嘲けりわらふ声は野山にみち、苦しみの叫びは心臓を破裂せり」と彼にかかせている。「貧しい人間のむれ」が恐ろしいという所にはこんな被害妄想患者のいだくような理由が伏在しているのである。

註 ⑩ 「月に吠える」

⑪ 雷電と上州気質「前橋市上新田の雷電神社では、雷神のはく草鞋を作って供えるが、雷除けの時は供えた草鞋を借りて来て、返す時は倍にして返す。いわゆる奉賛の信仰の一例である。これは落雷の時に、裸足の人が死に、草鞋をはいていた人が助かったということから起った信仰と思われるということである。」（「雷の科学」畠山久尚）

「1942年7月1日の夜、前橋には大雷雨があった。ちょうど一昨年からの継続事業として雷光観測のために前橋に来合わせていた私たちにとっては、この雷雨はたいへんありがたかった。あとで新聞で知ったことであるが、落雷の被害も相当多く、前橋市内でも4か所落雷し、付近の農家が1軒そのために焼けたそうである。」（「雷獣」中谷宇吉郎）

雷雨が近づくと、気圧が低下して「重くるしい」天気となり、動物さえも落つかなくなる。ましてや精神病者や学童たち、わけても女性の多くの人々が怒りっぽくなったり、元気を失くしたりするのは無理もないことである。（日本医事新報1626号、昭和31年、当時群馬県藤岡保健所長松井好夫「気象と精神」）

⑫ クレッチメルの分裂症に関する説明（同上「詩人大手拓次の病理」）

朔太郎のあこがれたボードレールは、その壮年期（31才～36才頃）すでに性的不能者であったようであるが、わが朔太郎の性欲も動物的要素が僅少で、淡白なものであったのではなかろうか。「すつぱい女どもの愛からのがれてなにか職業をさがしてみよう」（駱駝）「心が愛するものを肉体で愛することができないといふのはなんたる邪悪の思想であらう」（月に吠える）私はこの二つの発言からしても彼が精神面では、性愛的に強烈でありながら、実行の面ではだめであると思われる、彼の精神と肉体との不一致（アンバランス）を思う。そして現実ばなれのした幻想の人が、現実と遠くはなれたところで、植物を相手にして恋を語ろうとしている姿を想像する。それは精神と肉体との相反する二者を一つにしようとする悲願を抱く者の姿であった。

「強い腕に抱かる」という彼の詩に、〈恐れるななにものをも恐れなさるなあなたは健康で幸福だ〉という詩句があるが、人間は正常で健康であらねばならぬ、いや必らずそうありたいと思う。この見地からして、私は朔太郎も不幸な人の一人であったことを思う。いや、漱石も太宰も芥川も拓次も同様に不幸な人であった。漱石は神経衰弱症で、基本的には循環病質であったが、精神分裂病（シツオイド）質の要素が非常に濃厚だった。詩人大手拓次も同じく分裂的性格異常者であった。芥川竜之介も神経衰弱症不眠症に悩み、太宰治も過労と飲酒がたたって神経衰弱症となっていた。

「草木姦淫」という語は「浄罪詩篇ノート」Aにかかれてある。このノートは、朔太郎が大正3年末から4年の始めにかけて「月に吠える」の中の一章である「竹とその哀傷」の一連の作品群を、とくに「浄罪詩篇」と名づけていたが、このノートは、「浄罪詩篇」の手控え帖である。ノートによってわれわれは詩篇の楽屋的な裏面を伺うことができるのである。

その一例をとるならば

「我は観念をはなれる、乃至観念をはなれんとする。日ぐれに及び我の健康の全く害なはるることを憂心するものである」

「白昼或は深夜に於て幻影するところの手は決ず（ママ）一個である、左手である、而てそは何人にも語ることを禁ぜられたるところのあるものの手である」

「草木及び魚介の類（たぐひ）と会話することに於て人間の白血球はその多量を消耗さ

れる。並びに草木心理に於て樹木花卉の最も恐怖するところはその灼かれ砕かれ乃至倒伐さるることにあらずして人心心霊の触手を以てタッチさるる場合である。 かくの如き 世界に於て人は 草木を支配し交歓し会話し甚だしきは姦淫することさへ出来る。（草木姦淫の罪業は人間至上の悪徳である、何となれば神威を犯すこと之れより甚だしきはない）」

「酒精及びハッシュの夢遊境以外かつて人間にかくされたるところ前人未発の魔宮殿がある。妖魔のBAL（ママ）がある。 心霊意識のため絶息する手淫がある。眩惑する妖姫がある。〈抹消し「舌をビランせしむる絶」〉芳香無比のLQUR（ママ）がある。而してこの種の風月賀宴に於ては空想が排斥され実感が歓迎されるための金門がある。門に於てそのかんぬきをあづかるところの羅卒はつねに青き璃璃（ママ）の衣装をきたる〈抹消―「その名をSENTIMENTALと呼ぶところの」〉妖鬼である。」

これらの語句は、自慰・手淫行為を、朔太郎流の誇張表現したものと見ることもできるが、人心心霊の触手をもってタッチすると説き、そのあたりは、観念を離れるといいながら、それに反して再度観念に再突入しているのはいったいどういうことか。朔太郎には、理論を超えた神秘的なところがあったと解すべきであろう。

霊性という語句を彼は「かくの如きものは最も進歩せる哲理と科化との説明にまつ外なし」といい「詩人はこれを直覚すれば足れり」とも言っている。

だから「草木姦淫」とは、草木は具象的な物であり、姦淫は人間の具体的な行為であるけれども、そこに観念的な「草木と交歓知足」するというような心理的観念的な営みが多分にもられていると解すべきだと思う。そのあたり幻想的なのである。

「新しい白樺の幹に接吻した」（「月に吠える」、恋を恋する人）

「月夜の晩に犬が柳の木をめぐって居るこの犬は何物かを感知して居る犬の心霊は光って居る（抹消） それは螢光線のやうに」（一行判読できない）（抹消）（浄罪詩篇ノートA）

「腰にはこるせっとのやうなものをはめてみた、襟には襟おしろいのやうなものをぬりつけた、かうしてひっそりとしなをつくりながら、わたしは娘たち

のするやうに、

こころもち首をかしげて、あたらしい白樺の幹に接吻した、くちびるにばらいろのべにをぬって、まつしろの高い樹木にすがりついた。」[9]（「恋を恋する人」）

この詩のばあいでは彼は、その性を倒錯して「優柔な傷つけられた含羞草」のような女性となり、男性である白樺の幹に接吻しているのである。

朔太郎は、草木姦淫の罪業は人間至上の悪徳であり、「悪徳の及すところの害毒は肉体をしてしんれつビランせしめ血統を汚しその霊魂をして永世地獄の最下級にまで〈一字不明〉堕せしむる種類のものである、何となれば神威を穢汚することこれより甚だしきはない。」[10]と書いている。

さらに、「最近に体得せるところの奇蹟、即ち草木姦淫の事実に就いては我は懺悔」と記している。

註 ⑨ 「恋を恋する人」萩原朔太郎遺稿 「浄罪詩篇ノオト」 渋谷国忠編「ノオトA」7

⑩ 「悪徳の及ぶところ……」同上

体の弱かった彼にとって、過度の自慰行為は、快楽どころか、一瞬の快楽極まりて、妖姫は一転して地獄の妖鬼となり、一瞬にして堕地獄の青き鬼と化し、救うべからさる悔恨となり、「手はしんしんとして疾患する。手は酸蝕されたる石英の如くにして傷み最もはげしくなる。」のであった。彼にとって悔恨とは懺悔、浄罪とほとんど同じ内容のイメージであった。

「懺悔・浄罪」といえばキリスト教的であるが、朔太郎にとっては、多分に、キリスト教的宗教的語彙にあらずして、生理的「悔恨」の意であった。

またうそのつけない「馬鹿正直で困ってしまう」といわれる程己れを飾ることのできない朔太郎であった。そして、手紙魔といわれるほどに彼は手紙を書いた。手紙とともに手記めいた「浄罪ノオト」のような文章もどんどん書いた。「虚妄の正義」のようなアフォリズムや「詩の原理」のような論や「恋愛名歌集」、「郷愁の詩人与謝蕪村」のような古典鑑賞もどんどんものした。

また彼が自分の詩作品について解説的な文を書き残しておいてくれたこと

は、彼の性格を知る上に役立つだけでなしに、彼の詩を理解鑑賞する上ですこぶる役立つ。そういう意味では、手紙も手記も同断である。

「浄罪詩篇ノオト」には、彼の若き日の悩める姿が浮彫りされているのである。そして、それは、大正末期から昭和へかけて青春を生きた人々たちに共通のことがらでもあった。

かく、新興宗教の教祖さまの御筆先のように、書きまくるということは、精神症者の、一特色とも言えるのである。

朔太郎の青春の生き方は、いわゆる、名人気質のところがあり、成人してからもずっと尾を引いた。言葉をかえれば、「ぐにゃぐにゃとカンカンとが」交互にくりかえされた。ある時期には、日夜飲酒にふけり、1カ月も連日飲み歩いて終電車で帰ったり、時には帰らない夜もあったりして、彼の顔は疲労ですっかりやつれて黒く澱んでいた。そして彼は酒をのむとまるでたわいのない子供になってしまい、酒をのみに出かける時にはむちゃくちゃになる自分を警戒して、10円しかふところに入れて出なかった彼ではあった。そして、時にはつかい残しの金を財布ぐるみ投げ出して、「酒場の白鼠のような女の亡霊どもに」投げ与えることもあった。ある時には彼は家へ夜更けにたどりつき泥酔していて、門にぶっ倒れ、折しも降ってきた雨にぬれそぼっていたのを、家の飼犬のノネに発見され吠えたてられて家人が気ずきかろうじて助かったこともあった。ぐにゃぐにゃに徹していた好例の一つである。

ところが、その裏があった。一たん何かに触発されて感奮興起すると、ぐにゃぐにゃさんは、カンカン男に早変りした。仕事に熱中しだすと、人格ががらりと変り、夜分の晩酌ぐらいはつづけたかも知れないが、いっさい門外に出ず、2階の自室にこもって書きつぎ書きつぎ、いっこうの疲労もみせず努力精進をつづけた。

友人などの訪問もいっさいうけつけず2階から手をふって追い返したほどであった。

こうした精神的行為の二重性である、名人気質とよばれるものも、一種の神経症に深いつながりがあるのではなかろうか。

6

朔太郎にとって西洋とはいったい何か。彼は一度も洋行したことはなかった。

〈ふらんすへ行きたしと思へどもふらんすはあまりに遠し〉

で、その憧憬は実現に至らなかった。だから、彼の西洋とは、ショウペンハウエルやニイチエ等の翻訳書をよみ漁って、いくつかの西洋のコマ切れを、翻訳者が勝手に描いた夢のかけらを拾って、自分の精神の中に、ひとり合点の西洋をでっちあげたものにすぎなかったのではなかろうか。

室生犀星に言わせると、朔太郎は、「ぐにゃぐにゃさんがカンカン男になり、カンカン男が哲学者の鉄兜をかぶり時折ニイチエの義眼をはめこんでいた」であった。

彼はそのアフオリズムの中で、

「我々の日本人にとって、西洋は「橋」にすぎない。新しい時代を創るために、日本が通過しなければならないところの、単なるコースにすぎない。どんな将来に於ても、西洋は日本の目標ではない。だが目下の場合としては、その橋を通過するといふことが、日本のインテリゼンスの急務となってる。過去半世紀の間に、西洋の「趣味性」を通過してゐる。だがもっと本質的に必要なことは、西洋の「知性」を通過するといふことである。それは西洋の知性の方が、日本の知性より上位であり、価値が高いといふ意味ではない。それを通過しないものには、汝自身が解らないといふ意味である」と書いている。

これは西洋的知性を日本に取り入れる必要を一応説いて、しかもそれは「通過」であって「目標」でないとし、日本的情緒性の窮極的優位を暗に示していると考えられる。

ここにも彼の日本回帰の根源がみつけられる。

また、それは当時詩壇を牛耳っていた三木露風の象徴詩派に対しての反抗であった。象徴詩派がフランスのシンボリズムの影響を強くうけて難しい言葉を羅列するのを立前とするに反抗して平易な日常語をとりあげた。日夏耿之介は「萩原君の神秘派打倒説は学的には大したいわれのないことで、三木君の発声

と表現とが悉くきらいなのである」といっている。

このことは、いいかえれば三木に表現された西洋風が気にいらないということなのである。

また、彼のとりあげた詩誌の名「感情」という語は、西洋から来た翻訳語であるのだが、当時のオーソリティであった自然主義思潮ではもっとも低俗として軽蔑した「呪われたることば」であった。彼はこんな語を敢てとり上げて、自分たちの詩誌と詩社名とした。

ここにも、西洋にかぶれた象徴詩派に対する反抗の姿勢がみられる。

朔太郎の西洋とは何か。明治以来とうとうとして入り来った西洋の文芸思潮の浪にもまれての、ショーペンハウエルとかニイチエとかボードレールとか誰とか彼とか翻訳の論説や作品にはぐくまれた世界が西洋であった。

知的追求の西洋的思考過程のようなものもいつか身につけて、多数くのエッセイやアフォリズムを書き進めた。

「月に吠える」「青猫」の両詩集で、口語詩を大成した朔太郎は、そのたくみな口語駆使によって、彼の病的なまでの暗うつの、あえかな感覚と情緒をその口語詩の中に定着し得たのであった。しかし彼はやがて、その口語詩の新領土の中に、無限の発展を思うことが不可能であることに気づく時が来た。

彼はいつの間にか口語を去って文語詩に愛着を感ずるようになった。「郷土望景詩」10篇は大正12年から14年までの作品で、故郷前橋を去って上京した朔太郎の望郷の詩篇で、故郷への怒りと悲しみのうたである。

時に38才、ふと気づけば、けんらんたる青春、あえかな泥沼、妖艶に病める若き日の黄金の時間はもう過ぎ去っていた。自分の使った詩語にも手垢のついた月並語であることに気づいた。

口語を捨て文語に帰ったその裏には、少年時代に短歌をつくったことが遠く尾を引いている。

おち椿ふみては人のこひしくて春日七日を倦じぬる里

（前橋中学校校友会誌「坂東太郎」に、明治35年、17才の時発表）

たづたづし暗きにおつる身の果をなぐさみ得なば足らん我幸

（与謝野鉄幹主宰の「明星」に明治36年投書し発表）

心臓に匕首たてよシャンパーニュ栓抜くごとき音のしつべし

（明治42年、「スバル」に投書して発表）

このように短歌はつくったが俳句の作品はなかった。

この少年時代に短歌をつくったことが尾を引いて、昭和6年、46才の時には「恋愛名歌集」を刊行した。この執筆は昭和2年より4年ごろまでになされたようである。これは万葉集から新古今集までの歌の中で彼を感動させた恋愛の歌341首を撰び出して、ユニークな鑑賞をしたものであった。

「月に吠える」や「青猫」が、若干西洋であるならば、文語表現の「恋愛名歌集」や、少年時の歌などは、若干日本で、その意味から日本回帰であるといい得ると思う。

また、昭和11年、51才の時出版した「郷愁の詩人与謝蕪村」も前と同様日本回帰である。

「日本への回帰」――昭和13年、53才で彼はいう。

「僕等は西洋的なる知性を経て、日本的なるものの探究に帰って来た。その巡歴の日は寒くて悲しかった。なぜなら西洋的インテリゼンスは、大衆的にも、文壇的にも、この国の風土に根づくことがなかったから。僕等は異端者として待遇され、エトランゼとして生活して来た。しかも今、日本的なるものへの批判と関心を持つ多くの人は、不思議にも皆この「異端者」とエトランゼの一群なのだ。或る皮相な見解者は、この現象を目してインテリの敗北だと言ひ、僕等の戦ひに於ける「卑怯な退却」だと宣言する。しかしながら僕等は、かつて一度も退却したことは無かったのだ。逆に僕等は、敵の重囲を突いて盲滅法に突進した。そしてやっと脱出に成功した時、虚無の空漠たる平野に出たのだ。今、此処には何の影像もない。雲と空と、そして自分の地上の影と、飢えた孤独の心があるばかりだ。

西洋的なる知性は、遂にこの国に於て敗北せねばならないだろうか。遂にその最後の日に、僕等は「虚無」と衝突せねばならないだろうか。否々。僕等はあへてそのニヒルを蹂躙しよう。むしろ西洋的なる知性の故に、僕等は新日本

を創設することの使命を感ずる。（略）日本的なものへの回帰！ それは僕等詩人にとって、よるべなき魂の悲しい漂泊者の歌を意味するのだ。誰か軍歌の凱歌と共に、勇ましい進軍喇叭で歌はれようか。かの声を大きくして、僕等に国粋主義の号令をかけるものよ。暫く我が静かなる周囲を去れ。」

若さゆえに、日本の伝統的なものは一切排げきして一筋に、西洋的知性の道を進んだのであった。ソクラテースが、ショウペンハウエルが、ニイチエが、ボードレールが辻々に立っていてガイドしてくれた道であった。

そんな道をしゃにむにに強行軍して壁にぶっつかり、脱出したところは虚無（ニヒル）の荒野でしかなかった。そこには「飢えた孤独の心」の影が横たわるのみであった。彼にとって50才までの長い青春、その長い青春の黄昏が来ていた。

朔太郎は次のことを悟った

口語表現は西洋語の翻訳によって側面からささえられながら、大正昭和期の新詩創作に大いに役立ち、彼自身その第一人者だったが、今、長い青春が終り晩年を迎えようとする時、口語表現の限界を知らされ、一切の自分の業跡を利根の川流になげうちたい気もちだ。

絶望の果てに、ボードレールは〈何処でもよい、 何処でもよい、 世界の外へ〉脱出を企てたが、わが朔太郎は〈利根川の流れに一切を捨てんとす〉といっただけで、なお、一縷の希望を残し、〈西洋的の知性の故に、新日本を建設せんとす〉といってはいるが、それは、非常にうつろな響きをもっているのである。

芭蕉は死期の近きを知って、「旅に病むで夢は枯野をかけめぐる」の句を一夜呑舟に写しとらせたものを翌日、「枯れ野をめぐる夢心」とどちらがよいか弟子たちにとい、 「併しかゝる生死の一大事を前に置きながら、 いかに生涯好みし風流とはいひながら、 これも妄執の一つともいふべけん。 今は本意なし」と言ったことが「花屋日記」に書かれている。即ち芭蕉程の大家も、体力の衰えには勝てず、その生涯をかけた俳諧の道も、仏の戒めたもう妄執と断じたのであるが、わが朔太郎のばあいも、病気のための衰弱によって「氷島」には芸術的積極的意図は捨てさられ、「実生活の記録であり切実にかかれた心の

日記」である、としている。

少年時から精神の一角に黙々と伸びつつあった、文語的短歌調の魅力が抬頭して来た。――この中には懐古のナツカシノメロデーも潜んでいたであろう。そんな意味での日本回帰である。また「氷島」の自序のあとに次の一句があ。

我が心また新しく泣かんとすという前書きで

冬日暮れぬ思ひ起せや岩に牡蠣

自序に、日本詩の未来形態は素朴純粋な、日本の和歌や俳句であらねばならぬといっており、この句は、そうした試みの最初の句とでもいうべきであろう。

この句は芭蕉の「この秋は何で年寄る雲に鳥」とその語の構成が似ている。芭蕉のは閑寂に徹した自然（人生）観照の句であるが、朔太郎のは、索漠たる人生の終点に於ける悲痛な感慨をのべたものである。

岩は非情な人生の象徴であろう。これは、父に死なれ、妻に去られた朔太郎のやるせない痛憤が大いに関係しているであろう。牡蠣は、そんな非情冷酷の人生にすがりついていた哀れな自己をさすのであろう。